

ひまわりの ブーケ

ノエル・ランバート・バラス
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話はデンマークでの出来事です。

アマリーはお母さんとお父さんの後について、教会のドアをくぐりました。賛美歌をかなでるピアノの音が礼拝堂を満たしています。アマリーと家族は、長椅子を見つけてすわりました。

聖餐会が始まり、間もなく支部のみんなで開会の賛美歌を歌い始めました。歌っている間、アマリーはおとなりに住むアイシャ姉妹が近くにすわっているのに気づきました。でも、アイシャ姉妹は歌っていません。顔をしかめています。

アイシャ姉妹はいつもアマリーに親切にしてくれます。でも、とても悲しそうに見えます。アマリーは、アイシャ姉妹が一人でくらしていることを知っていました。もしかしたらさびしいのかもしれない。

アマリーは、自分に何かできることがあればいいのにと思いました。でも、何をすればよいのでしょうか？

次の週、アマリーは長い道を自転車で走りに行きました。大きな緑の野原を走りぬけました。太陽がはだを熱くしました。

やがてアマリーはひまわり畑にたどり着きました。あざ

やかな黄色の花が風になびき、太陽に向かってのびていました。とてもせが高く、とても大きいです！

畑の横の看板にはこう書いてありました。ひまわり無料！ほしだけ持って行ってください。

アマリーは畑をじっと見つめました。花はまるで空に向かってほほえんでいる黄色い海の様でした。

アマリーは自転車をとめて、たくさんの花をつみました。お母さんにあげるといいかもしれません！お母さんは花が大好きです。でも花はたくさんあるので、ほかの人の分もつむことができます。

アマリーの心に、ある名前がうかびました。アイシャ姉妹です。もしかしたら、この花がアイシャ姉妹の一日を明るくしてくれるかもしれません。

「ひまわりが好きだといいな」と、アマリーは静かにひとりごとを言いました。けれども、アマリーは少しきんちょうしました。アイシャ姉妹が、不思議に思ったらどうしよう？

アマリーは花をつむのをやめま

アマリーは
助けたいと思いました。
でも、どうやって？

した。やわらかい花びらを指でこすりました。アイシャ姉妹に花をあげない方がいいのかもしれない。

いいえ、とアマリーは思いました。アイシャ姉妹に花をあげるべきだと、アマリーは分かりました。それですべてが良くなるわけではないかもしれませんが。それでもアマリーは、たとえ小さなことでもいから、助けたいと思いました。あした教会でアイシャ姉妹に花をわたすといいでしょう。

アマリーは長い時間をかけて、最高の花をつみました。つんだ花をまとめて自転車のかごにそっと入れました。そして、自転車に飛び乗って家に帰りました。森の深い緑を背景に、花のあざやかな黄色がかわいらしく見えました。

アマリーは家に帰ると、花束を一つ一つリボンで結びました。一つはお母さんにあげました。

お母さんはそれを見て大きな笑顔をかきました。「ありがとう！きれいだわ。」そして、花を花瓶に生けてテーブルの上に置きました。

次の日、アマリーはもう一つのひまわりの花束を教会に持って行きました。アイシャ姉妹が一人で長椅子にすわっているのを見つけました。

「こんにちは」と、アマリーは言いました。「姉妹のためにひまわりをつんできたんです。」



アマリーは花を差し出しました。アイシャ姉妹は花を見ると、ほほえみました。アマリーはアイシャ姉妹の笑顔を見ることがありませんでした。目には光が満ちていました。

「ありがとう」と、アイシャ姉妹は言いました。そしてアマリーをだきしめました。「この花はわたしの大好きな花なのよ。」

アマリーもにっこりとほほえみました。それがアイシャ姉妹の好きな花だとは知りませんでした！でも、アイシャ姉妹のために花束を作るようにせいいいがうながして下さったのです。アマリーは自分がせいいいに耳をかたむけたことに感謝しました。●

「もし何かよいことをしようと
思うのであれば、
それはせいいいによるうながしです。」

デビッド・A・ベドナー長老、Face to Face
(青少年のための世界放送、2015年5月12日)
「福音ライブラリー」